



小出恵理奈（1986-）ステップス二度目の個展である。四年振りになるのだが、小出はグループ展でこまめに作品を発表し、2016年には彩色職人に弟子入りしているから、旺盛に活動しているということが出来るであろう。

小出は今回、大型、中型、小型と様々なサイズの支持体に描いた作品を発表している。実に多様な色、形で描かれ、ギャラリーが花畑と化した印象を受けた。「明るい」というよりも、流動的な「動き」がそうさせたのか。

会場全体が生きているような雰囲気である。心がざわめき、何かしたい気持ちになる。落ち着かないのとは違う。うきうきとした気分になるのだ。これこそ芸術の力であろう。普段とは違う世界に連れて行ってくれる。

それは描いている小出にも共通するのではないか。小出が心を躍らせながら、描くことを喜びとしながら作品を制作している姿が目に見え、四年前の青い画面は多色となり、更に抽象性も強調されている。

私達が手に入れた作品のタイトルは《picturesque #1》である。なぜこの作品を選んだのかと言えば、先ずは大きさが程よく部屋に馴染むこと、色彩が多色で重いこと、何にも見えない強い抽象性を携えていること等である。

「picturesque」。辞書で意味を調べれば、「絵のように美しい」「生き生きとした、真に迫った」などとなっている。無論、18世紀のイギリスで議論となった美術史の専門用語ではあるのだが、ここではそれを抜きにして考える。

小出は抽象画を志しているので「真に迫った」というと、「予め用意されている風景に近い」という意味ではなく、抽象としての本質に迫っていることになる。絵なのに「絵のように美しい」とは本当にユニークなタイトルである。同時に、自己への厳しさを携えている。小出は真の意味の「絵の美しさ」を探求する。

